

ダニエル書 - 第九十二号

預言を解き明かす：ダニエル書最後の六節の三重適用と第三の天使の前進する光

Jeff Pippenger

2024-02-25

ミレライト運動においては、知識の増加が解き明かされ、それは米国のプロテスタントを自称する者たちを主として、しかし彼らだけに限らず試した。教皇至上の暗闇から出てきた教会であるサルデスは、天にある聖所が開かれるときに明らかにされるはずの福音について、さらに完全な理解へと導かれていた。第三天使の運動においては、2001年9月1日に知識の増加が解き明かされ、それは世界中のラオデキア的アドベンチズムを試した。このため、知識の増加の源であるダニエル書11章の最後の六節に表されている真理は、ラオデキア的アドベンチズムからの抵抗にあった。

真の土台（第一コリント 3:10, 11）の上に建てるごく少数の忠実な建築者たちは、誤った教義の瓦礫が働きをふさいだため、困惑し、妨げられた。ネヘミヤの時代にエルサレムの城壁を築いた建築者たちのように、ある者はこう言おうとしていた。「荷を担う者の力は衰え、瓦礫が多すぎて、私たちは建てることができない。」ネヘミヤ 4:10. 迫害、欺瞞、不義、そしてサタンが彼らの前進を阻むために考え出さるあらゆる障害との絶え間ない戦いに疲れ果て、かつて忠実な建築者であった者の中には意気消沈する者も出た。そして、平安と自分たちの財産や命の安全のために、彼らは真の土台から離れてしまった。だが、敵の反対にもひるまなかった別の者たちは、恐れずにこう宣言した。「彼らを恐れるな。大いなる、恐るべき主を覚えよ」（14節）。そして彼らは皆それぞれ腰に剣を帯びて、働きを進めた。エペソ 6:17.

どの時代においても、真理に対する同じ憎悪と反対の霊が神の敵を駆り立ててきたし、主のしもべたちには同じ警戒と忠実さが求められてきた。最初の弟子たちに語られたキリストの言葉は、時の終わりに至るまで、キリストに従う者たちすべてに当てはまる——「わたしがあなたがたに言うことは、すべての人にも言う。目を覚ましていなさい。」マルコ13:37. 『大争闘』56頁.

ダニエル書の最後の六節に関するメッセージの提示は、ラオデキア的アドベンチズムの自給自立の宣教団体という環境の中で始まり、その後、時の経過とともに、ラオデキア的アドベンチズムの著名な神学者（学識者）たちからの挑戦に直面した。メッセージを失墜させようとして用いられた武器は、例外なく、吟味と攻撃の対象となっていたこれらの聖句に、より大きな光と明瞭さをもたらした。そうした攻撃は最終的に、それまで認識されていなかった預言的理解へと導き、それらは確立され、第三天使の前進する光の一部であることが明らかになった。

ミラー派は聖書預言における王国を四つだけ認めていたが、1844年の直後に、アメリカ合衆国が黙示録13章の地からの獣であると理解されるようになり、その理解によって、ローマ教皇制は単にローマ帝国の一部ではなく、実際には聖書預言の第五の王国であることが明らかになった。

大いなる赤い竜、豹のような獣、そして小羊のような角を持つ獣という象徴によって、神の律法を踏みにじり、その民を迫害することをとりわけ行う地上の諸政府がヨハネに示された。この戦いは時の終わりまで続く。聖なる女とその子らに象徴される神の民は、きわめて少数派として示されていた。終わりの日には、なお残りの者だけが存在していた。これらの者について、ヨハネは「神の戒めを守り、イエス・キリストの証しを持つ者たち」と語っている。

異教を通して、そして次いで教皇制を通して、サタンは多くの世紀にわたり、地上から神の忠実な証人たちを消し去ろうとしてその力をふるった。異教徒と教皇派は同じ竜の霊に駆り立てられていた。両者の違いはただ、神に仕えるふりをする教皇制のほうが、より危険で残酷な敵であったという点だけである。ローマ教を手段として、サタンは世界を虜にした。神の名を掲げる教会はこの惑わしの陣営に取り込まれ、千年以上のあいだ、神の民は竜の怒りのもとで苦しんだ。そして教皇制がその力を奪われ、迫害をやめざるをえなくなったとき、ヨハネは、竜の声に呼応し、同じ残酷で冒流的な業を推し進める新しい勢力が台頭するのを見た。神の教会と律法に対して戦いを挑む最後のこの勢力は、子羊のような角を持つ獣によって象徴された。

「しかし、予言の筆の厳しい筆致は、この平和な光景に変化が訪れることを明らかにする。子羊のような角を持つ獣は竜の声で語り、『自らの前にいた第一の獣のもつあらゆる権勢を行使する』。予言はまた、それが地に住む者たちに獣の像を作るようにと言うであろうと宣言し、さらに『小さい者も大きい者も、富む者も貧しい者も、自由人も奴隷も、みな右手か額に印を受けるようにさせ、また、その印、あるいは獣の名、またはその名の数を持つ者以外は、だれも買うことも売ることもできないようにする』と言う。かくして、プロテスタント主義は教皇制の足跡をたどる。」 Signs of the Times, 1899年11月1日。

ダニエル書11章の最後の六節の封印が解かれたとき、そこに描かれた一連の展開全体が、ホワイト姉妹が「異教」「教皇権」「プロテスタント」と特定した三つの勢力の相互作用を扱っていることが認識された。敵は、41節の「栄光の地」はプロテスタントかセブンスデー・アドベンチスト教会のいずれかの象徴だと主張したが、「栄光の地」はアメリカ合衆国であり、41節では北の王（教皇権）が、間もなく到来する日曜法の時にアメリカ合衆国を征服する。「栄光の地」をアメリカ合衆国以外の何かだとするサタンの誤りは、ダニエル書11章の最後の六節で表される期間において、1989年のソ連崩壊に続く次の預言的出来事が、間もなく到来する日曜法であることを、人々に認識させないために仕組まれている。

セブンスデー・アドベンチストにとって、これは、41節が神の教会に対する恩恵期間の終結を示していることを意味し、ラオデキア的アドベンチズムが最後に聞きたくないのは、自分たちの恩恵期間が尽きつつあるという知らせである！ 主は議論を導かれ、紀元前31年のアクティウムの海戦で異教ローマが世界の支配権を握ったとき、ダニエル書8章に表されているように、まず三つの地理的勢力を征服しなければならなかったことが認識されるところまで至らせた。

そのうちの一つから小さな角が現れ、南と東、そして美しい地に向かって、きわめて大きくなった。ダニエル書 8:9。

「南」「東」そして「美しい地」が、聖書の預言における第四の王国として地上の王座に就くにあたって異教ローマが支配下に置いた三つの地理的地域を表していたことは、確立した事実であった。この事実と相まって、ダニエル書七章に示されているように、教皇ローマもまた、聖書の預言における第五の王国として地上の王座に就く際に、三つの地理的勢力を打ち破らなければならなかった。

私はその角に目を向けていたが、見よ、それらの間から別の小さな角が一本生えてきた。その前に、もとの角のうち三本が根こそぎに引き抜かれた。さらに見よ、その角には人の目のような目があり、大いなることを語る口があった。ダニエル書 7:8

第四十一節の「栄光の地」をめぐって繰り広げられた論争の中で、主は、預言においてローマには三つの現れがあることを示された。すなわち異教ローマであり、その後に教皇ローマが続き、さらに終末のローマがあり、私たちはそれを「現代のローマ」と呼んだ。預言に関する健全で確立された二つの真理、すなわち第一に神は決して変わらないということ、第二に真理は二人の証人の証言によって確立されるということに基づき、私たちは、ダニエル書第十一章の最後の六節における北の王にとっての三つの障害は、現代の三つの地理的勢力を指しているに違いないと、揺らぐことなく結論した。

イエス・キリストは、昨日も今日も、永遠に同じです。ヘブライ人への手紙 13:8.

また、あなたがたの律法にも、「二人の人の証言は真実である」と書いてある。ヨハネ8:17.

この認識は、私たちがすでに下していた結論を裏づけるものとなった。というのも、私たちは「栄光の地」を地理的勢力（すなわちアメリカ合衆国）と見なしており、それが教会という霊的勢力を表すのだという愚かな考えは退けていたからである。私たちは、神の言葉には偶然はないという、常に確認されてきた信念に基づいてこの立場を取った。多くの証しによって明らかなおおりの、終わりの日における神の教会は山である。

終わりの日に、主の家の山は山々の頂に堅く立ち、丘々よりも高くそびえ、すべての国々がそこに流れて来る。多くの民が来て言う。「さあ、主の山へ、ヤコブの神の家へ登ろう。主はその道を私たちに教え、私たちはその道筋を歩もう。律法はシオンから出、主のことはエルサレムから出るからだ。」イザヤ書 2:2, 3.

「美しい地」を教会だと提案した人々は、多くの場合それがセブンスデー・アドベンチスト教会だと主張した。彼らがそうしたのは、ダニエルがその地を「美しい」と呼んでおり、浅はかな論法から、四十五節の「美しい聖なる山」が確かに神の終末の教会である以上、「美しい地」もまた教会に違いないと結論づけたからである。何しろ、どちらにも「美しい」という形容詞が含まれているのだから。

神の御言葉には誤りがない。そしてダニエルが「栄光の」という語と結びつけて「地」を用い、四節後には同じく「栄光の」という語と結びつけて「聖なる山」を用いているとき、ダニエルは意図的に地と山の区別を示している。文字通りの「栄光の地」はユダであり、神の神殿が建てられたのはエルサレムの都である。エルサレム、または神殿は神の教会と理解できるが、エルサレムが所在する領域はユダの地である。第三の天使の前進する光のもとで知識が増し加わるにつれて多くの真理が確立されたが、ここではローマの三

つの現れを指し示す預言の背景を簡単に概説しているにすぎない。

異教ローマと教皇ローマが、現代ローマの預言的特質を確立する二つの証しを与えていることを私たちが認識したとき、私はそれを「預言の三重適用」と呼ぶ解釈の原則を見出した。特定の預言が三重に繰り返されるという類似の考えを用いていた人々は他にもいたが、私たちが認識するに至った定義こそ、今も用いている定義である。Future for America によってしばしば適用されるこの「預言の三重適用」という預言解釈の規則が、ダニエル書11章の最後の6節をめぐる論証の過程で見出されたのだと理解することは重要であるが、同じくらい重要なのは、その論証が、預言の三重適用がローマに関するものであるという最初の認識へと導いた、という点である。ミラー派の歴史において、議論の一つは、アンティオコス・エピファネスがダニエルの民の「略奪者」であったのか、それともミラー派の理解するところでは「略奪者」はローマであったのか、ということであった。これが重要なのは、ダニエル書11章14節において、ダニエルの民の「略奪者」としてのローマこそが「幻を確立する」者だからである。

また、そのころには多くの者が南の王に逆らって立ち上がる。さらに、あなたの民の略奪者たちも、幻を成就させようとして高ぶる。しかし、彼らは倒れる。ダニエル 11:14.

私たちが預言の三重適用を初めて理解したのは、聖書の預言においてローマには三つの現れがあると認識したときだった。ミラー運動の歴史においてそうであったように、ローマは第三天使の前進する光の異象を確立した。ミラー運動の歴史では、聖所と軍勢を踏みじった力は異教と教皇制であるという理解こそが、ミラーが彼の預言理解の「すべて」を築き上げた真理の枠組みとなった。ダニエル書11章の最後の6節は、「フューチャー・フォー・アメリカ」がその預言的適用のすべてを築いてきた真理の枠組みを確立した。その枠組みとは、世界をハルマゲドンへと導く、竜・獣・偽預言者という三つの荒廃させる力である。

その枠組みは、異教ローマと教皇ローマという二つの証しが現代のローマを立証するという認識と、現代のローマとは心霊主義の竜（国際連合）、カトリックの獣（教皇権）、背教的プロテスタントの偽預言者（アメリカ合衆国）から成る三者連合であるという認識に基づいている。その枠組みを、私たちは預言の三重適用と呼んでいる。今後の記事では、これまでに認識されてきたさまざまな預言の三重適用を取り上げ、それらが三人の天使の前進する光の枠組みを形作っていることを論じる。

私たちは、ローマの三つの現れに対する三重適用を検討します。これは、ホワイト姉妹が教権と政権と呼んだ、現代ローマの政治的・宗教的構造を特定するものです。その構造は、現代ローマにおける特質を識別し確定する目的で、異教ローマの預言的特徴と教皇ローマの預言的特徴を結び合わせることによって認識されます。

私たちは、ニムロデ、ネブカドネザル、ベルシャザルに代表されるバビロンの三つの顕現の三重の適用を検討する。これらは、自分は神だと宣言して神の宮に座す罪の人の傲慢を明らかにするもので、イザヤはそれを「高ぶるアッシリア人」と呼んだ。聖書の預言の主題である教皇の傲慢は、現代のバビロンの特徴を識別し確立するために、バベルの預言的特徴とバビロンの預言的特徴を結び合わせることによって見いだされる。

私たちは、終わりの時代における「荒野で叫ぶ声」を指し示す、エリヤとバプテスマのヨハネによって表されるエリヤの三つの顕現の三重の適用を考察する。終わりの時代の「荒野で叫ぶ声」は、特定の見張り人、すなわち一つの運動を表し、始まりと終わりが類似した一つの運動における二重の証しを示す。第一と第二がなければ第三の天使はありえないと私たちは知らされているので、あるレベルでは第一の天使の運動を第三の天使の運動から切り離すことは不可能であり、両方の運動は、エリヤとバプテスマのヨハネによって型として示された見張り人によって表されている。

筆と言葉をもってこの宣言を高らかに告げ、その順序と、私たちを第三の天使のメッセージへと導く諸予言の適用を示さなければならない。第一と第二なしには第三はあり得ない。これらのメッセージを、出版物において、講演において、預言的歴史の流れに沿って、既に起こった事柄とこれから起こる事柄を示しつつ、世界に伝えるべきである。Selected Messages 第2巻 105頁。

私たちは、契約の使者が突然その宮に来られるための道を備える使者について、バプテスマのヨハネとウィリアム・ミラーに表されたものとして、その三つの顕現の三重の適用を考察する。最後の見張り人は、マラキ書三章の最終的成就を見極めるために、バプテスマのヨハネとウィリアム・ミラーの預言的特徴を結び合わせることによって認識される、預言の主題である。

見よ、わたしはわたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を備える。あなたがたが求める主が、突然、ご自分の宮に来られる。すなわち、あなたがたが喜ぶ契約の使者が来られるのだ。見よ、彼は来る、と万軍の主は言われる。マラキ 3:1。

私たちは、黙示録8章と9章の第一の災いと第二の災いにおけるイスラムの預言的特質によって表される、イスラムの三つの顕現の三重の適用を検討する。これらの特質は、黙示録10章と11章で示される第三の災いにおけるイスラムの預言的特質を明らかにしている。

これらの内容は次回の記事で続けます。

自分の頭で考えること、探求すること、祈ることを、誰にも代わりにさせてはなりません。これこそ、今日、私たちが肝に銘じるべき教えです。あなたがたの多くは、神の御国とイエス・キリストの尊い宝が、手にしている聖書の中にあると確信しています。地上のどんな宝も、骨の折れる努力なしには手に入らないことを、あなたがたは知っています。では、なぜ聖書を熱心に調べることなしに、神のことばの宝を理解できると期待するのですか。

聖書を読むことは正しくふさわしい。しかしあなたの務めはそれで終わらない。あなたがた自身でそのページを探り求めなければならないからである。神の知識は、知的な努力なしに、また、真理という純粋な麦粒を、人間とサタンが真理の教理をゆがめてきたもみ殻からより分けるための知恵を求める祈りなしには、得られない。サタンとその共謀者である人間の手先は、誤りというもみ殻を真理という麦に混ぜようと努めてきた。私たちは隠された宝を熱心に求め、人間の作り事を神の命令から見分けるために、天からの知恵を求めるべきである。聖霊は、贖いの計画に関わる偉大で尊い真理を求める者を助けてくださる。私は皆に、聖書を漫然と読むだけでは十分でないという事実を心に刻んでほしい。私たちは探し求めなければならない。すなわち、御言葉

が示すところを余すところなく行うということである。鉱夫が金脈を見いだすために熱心に地を探るように、あなたがたも、サタンが長い間人から隠そうとしてきた隠された宝を求めて、神の御言葉を探り究めなければならない。主は言われる、「もしだれかが神の御心を行おうとするなら、その教えがどのようなものかを知るであろう」
. ヨハネ7:17 キリスト教教育の基礎, 307.